

1学年だよ

令和3年9月22日(水)

# 夢の宅配便

1年学年主任

水野 喜代治

## 連載私小説「きっかけ！」 第3話…全力で走った運動会

昨日の雨が嘘のように晴れ渡っている。抜けるような青空が空いっぱい広がっている。ボン、ボン、ボンと花火が上がった。運動会実施の合図だ。一昨日のコスモス畑のこと、授業をさぼった件で、親が学校に呼び出されて、その夜に「運動会をちゃんとやる！」とお母ちゃんと約束したので、今年の運動会は、いい加減なことはできない。曾我小学校のすべての先生方が私の一挙手一投足を見ている。花火の音を聞きながら、まるで戦場に出征する兵士のような気持ちで、ランドセルの中に白組の帽子や 二人三脚で使う手拭いをいれた。家を出るときに、「喜代治！頑張ってよ！ちゃんと運動会に参加してね。夜にお母ちゃんに運動会で楽しかったことを話してね。話を聞くのを楽しみにしてるからね。お弁当は、恵子おばさんに、渡しておくので、お昼になったら、おばさんと一緒に食べてね。また、一人でブランコやジャングルジムに行かないで、恵子おばさんとハ一ちゃんと一緒に食べてね。」とお母ちゃんが笑顔で念を押した。従妹のハ一ちゃんは、すぐに、「おかあさん、喜代治がまた、位置について、用意、でスタートしちゃたんだよ。玉入れの時に、ふざけて本部席に球を投げて、先生に怒られたんだよ。」などと恵子おばさんに報告するので、一緒にお弁当を食べるのが苦痛だった。でも、一昨日、お母ちゃんに運動会をしっかりやり遂げると約束したので、「大丈夫だよ！安心してね。ジャングルジムなどでおにぎり食べないよ。駆けっこも全力ではしるよ。だから、お母ちゃんは、安心してお仕事頑張るってね。」と力こぶを見せて、安心させた。

学校につくと、校庭に万国旗が張られて、青空をバックに、さまざまな国旗がはためいていた。教室で、運動会の諸注意を担当の青柳先生が一生懸命に話している。一つ一つの注意がすべて私に当てはまり、まるで私に言っているかのように思えてきた。いつもなら、この時点で、教室を抜け出すところだが、お母ちゃんが目を赤くして「喜代治、ちゃんとやってね」と言った顔が浮かんで来て、最後まで先生の話聞いていた。

開会式も無事に終わって、だるま運び、玉入れ、50m走と順調に種目をこなしていく。玉入れも初めて、本部席に投げないでまじめにやった。お昼の最後の競技である鈴割りが紅白に分かれて行われた。みんなが「鈴割は、キヨちゃんが専門家だよ。去年は開会式の前に割っちゃったものね。」と笑いながら話しかけてきた。私がまじめに運動会をやっているの、みんなの顔もホッとして明るかった。鈴が割れて、中からきれいな紙吹雪がでて、午前中の種目の終わりの合図のピストルを小宮先生が鳴らした。「これから、お昼の時間です。生徒の皆さんは、保護者席でお弁当を食べてください。」と放送が入った。私が、恵子おばさんのところに行こうと思ったときに、担任の青柳先生が私を呼び止めた。「喜代治君、ちょっとお話があるからこっちに来てください。」私は、ぎくっとした。今日は、まじめにやっている、小宮先生が使うピストルの火薬を水につけたりしていないし、綱引きもぶら下がったりしないで、ちゃんと引っ張った。「先生、今日は僕はいい子です。許してください。」というと、「いいから、ちょっと来てください。」と青柳先生が言った。私は、なんで呼ばれるのだろうかと不安な気持ちで先生の後をついていった。 つづく